

学校番号	学校名	校長名
13	川崎市立東大島小学校	押田 春美

学校教育目標	今年度の重点目標
<p>明るくたくましい生き方のできる人間の育成 心のやさしい子・すすんで学ぶ子・元気な子</p> <p>【学びに向かう力・人間性等】 多様性を認め他者と協働することのできる子 学びの意義を実感して生活に生かすことのできる子</p> <p>【知識・技能】 基礎的・基本的な知識や概念を身につけ、それらに関連付け生かすことができる子</p> <p>【思考力・判断力・表現力】 様々な場面で課題をとらえ、既得の知識・技能を使って課題を解決することのできる子</p>	<p>1.一人一人に行き届く指導による確かな学力の育成 ・社会を生き抜く資質・能力を養う授業づくり ・主体的・対話的で深い学び ・GIGAスクール構想の推進(校内研究として端末を活用した授業づくりを研究) ・電子図書館を活用した読書活動の推進</p> <p>2.いきいき個性を發揮できるみんなが尊重し合う学校 ・自尊感情を高め、豊かな人間関係を築く意識や態度を養う教育の充実 ・規範意識をもち、気持ちのよい生活態度の育成 ・夢や希望をもち主体的に活動する態度の育成(市制100周年事業とあわせて)</p> <p>3.元気で安心・安全な学校 ・心身ともに安全で健康な生活を自ら実践する態度の育成 ・安全教育の充実 ・児童理解、教育相談、支援教育の充実</p> <p>4.地域・保護者ともに子どもを育てる学校づくり ・開かれた学校づくり(学校運営協議会等) ・保護者や地域から信頼される学校づくり ・地域への愛着、ふるさと東大島の心の育成(市制100周年事業とあわせて)</p>

評価項目	具体的な取組	成果と課題	具体的な改善策
一人一人に行き届く指導による確かな学力の育成	・少人数指導等個に応じたきめ細やかな指導	・一人一人のつまずきに細やかに対応するために、支援が必要な児童には、入り込みや取り出しの指導を行い、個に応じた指導を行った。3～6年の算数は算数専科が導入されており、児童の実態と学習の系統を意識した授業の展開を進めた。また、日本語指導が必要な児童においては、日本語初期支援員を配置し、国際級での個別での学習支援を行った。	・次年度も少人数指導の実施や入り込み・取り出し指導等、児童の実態に応じて柔軟な学習環境を展開できるようにする。今後も担任だけの指導にとどまらず複数の教職員で児童の学習状況を把握・共有し、適切な授業支援を行えるよう進めていく。Coを中心に学習支援計画を作成し、支援を円滑に進められるよう準備を整えていく。
	・指導に応じた適切な評価	・学習評価について、具体的な見とれをもとに校内で共通した評価を進めるため、校内での研修を定期的に行なった。校内研究の授業をもとに見とれや評価の考え方を意見交流し、具体的な姿を設定し、授業の中での見とれを行った。	・資質・能力の育成のために、何をどのように学ぶかという視点に立って、学習計画を立てることが大切になってくる。それぞれの学習場面で育っていく力と児童の学びの姿を具体的にイメージし、その姿が見られるような学習展開や学習活動を計画することで、指導と評価を一体としてとらえられるようにしたい。
	・個別と協働的な学びのためのICTの活用	・校内研究とGIGAスクール構想を組み合わせて研究の活用を積極的に取り入れた。効果的なGIGA端末の活用について検討を重ねた。	・本市のGIGAスクール構想はステップ3となり、一人一人の子どもが主語の端末活用となっている。子どもがより主体的な学びや解決に向けて、学びの蓄積から自らの課題をもつたり、解決の糸口となる情報を得たりするために端末を自分から活用できるように進めていきたい。
	・キャリア在り方教育の推進	・本校の特色ある取組としてあげられる「きょうだい班活動(縦割り活動)」や学校行事などキャリア教育と関連付けて連携を図った。年度初めに教職員での活動でキャリア教育を推進していくかを確認し、システムを意識して計画的に進めた。	・今後もキャリア在り方・生き方教育では学期の始めや終わり、学校行事やきょうだい班活動、学年での取組などで目標を立てたり、振り返りたりするためにキャリアノートを活用していく。節目ごとにおける児童自身の成長を振り返り、将来への展望につなげるためのキャリアパスポートを作成していく。
	・校内研究を中心とした授業力向上	・令和3年度から進めている校内研究テーマ「いきいきと表現し、学び合う～Chromebookを活用した授業づくり～」のもと、端末を活用した授業づくりを研究した。児童の表現力、学び合う姿勢の向上を図るため、端末の機能がどのように児童の学びに影響するのか、教科を定めて研究を試みた。ジャムボードやミラシンドを活用し、自分の考えを表現することや、互いの考えに気付くこと、自分の考えを広げることについて学び合うツールとして効果があった。授業展開で資質・能力を身につけるために、効果がある手立てとして端末を使うことを教師自身がきちんと理解することができた。	・新学習指導要領の改訂に伴い、ブロック別に身に付けさせた資質・能力を明確にして指導に当たっている。児童の学びの姿をイメージしながら授業をつくることを基本とし、GIGA端末の活用を取り入れた。様々な教科で端末を用いることができるので、授業の展開の仕方にも可能性がある。各教科等の特徴に応じた「見方・考え方」を働かせ、児童が主体的に学び合う授業を実践していきたい。
	・電子図書館を活用した読書活動	・保護者の協力を経て、全校児童のIDカードを作成した。電子図書館の利用の仕方を指導し、朝や国語の読書の時間を中心に電子図書館を活用した。手軽に本を読める環境に、児童が本に触れる機会が以前より増えた。	・朝や国語の読書の時間に実施した以外に、調べ学習や探究学習、読み聞かせなども活用するなど、幅を広げた利用の仕方が考えられる。本に触れたり、親しんだりする機会を意図的に設定し、電子図書館のよさを十分に活用していきたい。
いきいきと個性を發揮できるみんなが尊重し合う学校	・かわさき共生＊共育プログラム(効果測定)の活用	・小規模校の特性から、児童指導委員は全職員が参加している。各学年には学年付きで職員を配置し、支援教育Coが中心となって複数で児童・保護者に対応し、かわさき共生＊共育プログラム(効果測定)の活用。事実上、適切な配慮ができるよう、管理職の指導のもと対応にあっている。必要に応じて外部機関と連携し、教育相談やケース会議を実施した。また、効果測定のみとりをブロックで行い、皆で児童の変化を感じ取る感性を磨いた。	・児童をみどりやすい効果測定については、今後実施し、結果を検証する場を設ける。結果を複数で見たり話し合うことで、子どもが発しているサインを見逃すことのないようにするとともに、積極的に児童の様子を見ていくこと、どのような接し方があるのかについて検討し合うことで、学級経営を振り返る場、指導について学ぶ研修の機会とし、児童の安心安全な学校生活につなげていく。
	・自他を認め合う、道徳教育を推進	・他者を受け入れ、認め合う気持ちが身につく学びの場をきょうだい班活動(縦割り活動)に位置付けている。年間を通して高学年児童が主体的に企画・運営できるこの取組では、意見を交流する機会が多いため、コミュニケーションを得ることや互いを認め合うことの大切さを実感できた。	・きょうだい班活動は生きた教材として本校には必要な学びの場となっている。小規模校のよさを生かした取組である活動のため、今後も教育課程の編成を考え、活動を展開していきたい。
	・東大島スタンダードを通してみんなで守るマナーやルールを学校全体で指導	・昨年度に続き、学校のルールを守って生活していると回答した児童は9割に上った(学校評価アンケート児童版)。日頃、東大島スタンダード、「東大島小学校の1日」など、教職員が同じルールのもとで児童にかかわっている。ルールやきまりを話すときにはその理由や訳について、説明することを共通理解している。生活目標について伝える朝会では、端末のスライド機能を用いるなどして、映像での指導は視覚的な理解に有効であり、ルールの徹底に効果があった。また、今年度も、年度初めには児童の端末使用における情報モラルの共通理解が必要と考え、全校児童と確認を行った。	・児童対応については、学校全体で同じ体制で支援する必要があることから、今後も全体で支援のあり方について共通理解を図ることで、教職員間の指導にずれが生じないようにする。今まで通り、ルールやきまりを話す時には、その理由についても併せて説明していくようにし、児童がきちんと理解をした上で東大島小スタンダードを果たせるように努めていく。
	・きょうだい班を中心に児童の思いや願いを反映した児童会活動の実践	・児童が主体的に企画・運営できる活動環境を大切にしたい。教師は、教師主導にならないよう、児童に取組の良さを認める声かけをし、主体性が育まれるよう、助言する立場としてかかわるようになっている。児童のいきいきと行事に取り組む姿は、そういった環境の中で生まれ、自分の役割に対する責任感や達成感が得られることで、自己有用感が育まれた。そのことは、学校評価アンケートの設問「学校が楽しい」と回答した児童が9割に達したこと、きょうだい班活動から得られる充実感が大きいことが見て取れる。高学年の姿を間近で見られるのも、縦割り活動の良さであり、下学年児童は、年長者の活躍に憧れ意識をもつことと進級、成長する喜びもつながった。	・引き続き、達成感を感じ、自己有用感が感じられるよう支援・指導にあたる。学校評価の検証から、保護者、児童、教職員の3者において、きょうだい班活動が児童の成長に必要であると示されている。編成上きょうだい班活動は裁量扱いとなっていることから、授業時数増における適切な時間数の中できょうだい班活動を進めていきたい。今後も引き続き、きょうだい班活動のよさとその価値を、教職員が明確に共通認識していくことで、児童の活動する姿を価値づけ、さらなる成長につなげていきたい。

3	元気で安心・安全な学校	・挨拶、時間、食事、睡眠など基本的な生活習慣の確立と定着(東大島小学校の1日、元気アップシートの活用)	・家庭でも基本的な生活習慣の定着のために、「元気アップシート」を作成し取り組んだ。長期休業中も同様に作成し、児童の生活習慣の形成に家庭と共に進めることができた。	・各家庭で取り組んだ元気アップシートから学年が上がるにつれて、生活習慣が乱れる傾向にあることが見てとれる。この取組は、学校が個々の家庭生活の様子を知る機会となっているため、学校と家庭の両側面から児童の生活習慣を見つめ、改善につなげていきたい。次年度も継続していく。
		・食育、食物アレルギーへの適切な対応、保健指導、新しい生活様式の実践	・食物アレルギー対策委員会を中心に該当する児童の保護者からの管理指導票をもとに協議を行い、対応を図った。日々、栄養職員と給食調理員が連絡調整し、除去食等の対応を行い、担任のサインによるチェックと立会いの下での給食の受け渡しをし、誤食事故を未然に防いでいる。年度初めには、食物アレルギー対応研修を開催し、教職員全員で該当児童や対応方法など共通理解を図った。 担任と栄養士が連携し、「糖分のとりかた」や「和食のよさ」「汁三菜」など、学年や児童の実態に合わせて食育の指導を行った。	・食物アレルギーや疾患のある児童については、引き続き、全教職員で情報共有し、適切な対応ができるようにする。
		・避難訓練、交通ルール、情報モラル教育の充実	・4月の集団下校訓練と年間5回の避難訓練に加え、全学年による引き取り訓練を実施した。今年度の避難訓練では、地震・火災発生時の避難の仕方、浸水における垂直避難訓練に加え、不審者侵入時の防犯訓練についても児童・教職員間で共通理解を図った。 ・1、3年児童においては、行政機関、保護者と連携し、歩行教室や自転車教室を実施し、児童への交通安全教育を実施した。 ・情報モラル教育では、担任による「スマートフォン・タブレット安全教室」を行った。スライドを活用し、情報モラルに関わる内容をクイズ形式で考える時間をもった。責任と権利・義務、態度の問題など自ら考えさせ、理由を話し、理解できるような授業展開を行った。	・「自分の命は自分で守る」ことへのさらなる意識向上を目指し、高学年については、自助だけでなく、共助にも意識をもてるようにしていきたい。さらに、避難訓練のバリエーションを増やしたり、家庭や地域と連携した防災教育を実施したりしていきたい。 ・歩行教室や自転車教室は引き続き、体験学習を盛り込んだプログラムの実施で調整していく。防犯安全についても全学年で取り組み、犯罪にあわないための対応力を身に付けられる教育を促していく。情報モラル教育は、児童の実態や現状などを考慮し、時期や内容など計画的に進めていくようにする。また、校内でルールの再確認を行い、保護者への周知も併せて進めていく。
		・校内、敷地内の安全管理	・3期にわたる大規模改修工事が終了した。課題であった「切りアライ」化を実現し、現在も校庭には、使用されている体育小屋や敷土済みの小屋の基礎がむき出しになっているところがある。児童のけがにつながるような急激な対応をした上で、引き続き、早急な撤去を行政に繰り返し依頼していく必要がある。	・児童が校内で安心安全に生活することができるように、次年度も上記の早期対応を、行政に重ねて依頼していく。改修工事により新調された教室や設備の使い方については、児童と教職員で共有し、学校全体で確認しながら、清潔・安全な環境整備に努めていく。
		・児童指導上の課題の共有と、迅速かつ個に応じた適切な対応	・毎月の児童指導全体会を基盤に、児童の様子や、見直しが必要な事項についての情報交換を行い、問題行動の未然防止や早期対応のための手立てと指導を教職員全体で共有した。児童・保護者・担任の願いを取り入れながら、目標を設定し、日々の支援の方法を考え、共通理解のもとに全体指導や個別指導をした。日頃から児童のよさを保護者へ発信し、意見や要望を可能な限り受け入れ、学校と保護者の連絡を密にした上で、学校から協力をお願いしたいことを伝えてきた。緊急事態には随時ケース会議を行い、外部機関とも連携して地域支援会議も実施した。	・引き続き、情報共有や共通理解を密にし、問題行動の未然防止と早期発見のための職員研修を行う。また、各ケースに関わる主担当と関係協力者と協力し、情報共有、指導・対応をしていく。
いじめ、不登校を生まない環境づくり、児童理解を目的とした職員研修の実施	・毎朝のあいさつ運動や声かけにより、児童の様子の変化を察知し、情報共有を行い、不登校や登校渋りの未然防止に努めた。登校に後ろ向きな児童にはその家庭にも寄り添い、連絡を密にし、解決の糸口を考え、環境づくりに努めた。また、生活アンケート、共生や安全教室、教員用チェックリスト等を活用し、定期的に指導や支援の仕方を振り返り、日々の指導に生かした。遅刻や欠席の回数や理由から、児童の不安や家庭環境等の問題を発見し、早期に対応した。	・普段からの会話や関わりを軸に、児童の体や心の様子の変化をフナーで発見し、いじめや不登校の未然防止・早期発見に努める。欠席の回数や理由から、登校渋りが見受けられる時、その背景を把握し、長期欠席になる前に対応する。現代の不登校の原因は複雑化・多様化しているため、個々のケースに応じた柔軟な対応が必要であるという共通認識をもち、児童や家庭に寄り添いながら、学年や学校全体で組織的な対応をしていく。		
4	地域・保護者とともに子どもを育てる学校づくり	・学校、学年だより、学校HPの充実、メール配信による迅速な対応	・学校便り、学校ウェブサイト、学校生活の様子(学習面・生活面)や行事への取組の様子など積極的に発信した。児童の成長の様子や成果を伝えるように努めると共に、学校で考えている教育観を地域や保護者に伝えた。特に今年度は、授業参観や学校行事などで、より児童や学校の様子を保護者に伝える機会を得ることができた。	・ウェブサイトの公開性は高く、更新を定期的に行っていくことで、学校の教育活動への理解を図り、家庭・地域と連携して教育活動を進められるようにする。また、日本語支援が必要な家庭への連絡は、例年通り、個別対応することにより、言語による理解の困難さを減らせるようにする。
		・学校評価の充実と有効活用	・12月に学校評価アンケートを保護者、児童、教職員に実施した。それぞれのアンケート結果を今年度の学校の取組と照らし合わせる検証会を教職員全員で実施した。アンケートの結果から読み取れる事柄は、次年度の学校経営につなぐための貴重な資料として扱っていく。また、検証会の中で課題とされたものについては、年間反省でも取り上げ、次年度の計画で改善されるようにしている。今年度設置された、学校運営協議会内でもアンケート結果を取り上げ、地域の声を学校経営に反映するようにした。	・PDCAサイクルに則り、学校評価アンケートは年間の学校の取組について振り返る際の貴重な資料となった。今年度も設問を追加したり、学校経営計画と設問の整合性を見直ししたりして、学校の取組を評価するための整備を行った。 ・学校評価を通して、教職員は、経営を見直していく意識をもつと同時に、学校評価を機会に教職員全員が同じ教育理念で学校経営に携わっていくことを再確認していきたい。
		・教育相談の充実	・二者面談を6月、9月、12月と年3回、実施した。面談期間中には、同時に担任以外の面談も希望制で実施した。スクールカウンセラーと連携した児童・保護者への相談機会を設け、対応の幅が広がる等、教育相談の内容が充実した。	・次年度も引き続き、担任以外の面談の実施を行い、児童・保護者理解に努めていく。スクールカウンセラーとの連携を深め、児童理解、保護者理解を進めていく。
		・地域の素材や人材と連携した授業づくり	・3年生、4年生、5年生の総合では、地域の方の協力を得て授業を行った。3年生は地域の達人である祭りの再開について調べる学習として、4年生は川崎区の実物として有名な長十郎梨の歴史を調べる学習として、5年生は多摩川干潟の環境を調査する学習として実施した。夢21教育との関連を図り、これらの学習を継続してきたのは、支援者の方々の地域を受容する思いに児童が触れることによって、地域を受容する心が育まれていることを大切にしたいと考えてきたからである。児童の学びになるよう、児童の思いにあった総合の学習を計画し、今後も引き続き、協力を得ていく。	・学習を継続してきたものは、本校自慢のものであり、地域を受容する心情にもつながる大切なものである。次年度は、今年度に引き続き、児童の学びを継続していく予定だが、指導者となる地域の方の高齢化もあるため、学びを保障しつつも規模・内容などを見直した上で実施していきたい。
		・保護者ボランティアを募った児童の学びの充実	・運動会のPTAによる受付や校内外のハローワーク、3年の交通安全教室のボランティア、図書ボランティアによる朝読書の読み聞かせ、PTA主催で「学校参観」が行われたなど、学校と保護者が一体となって教育活動を推進していくという動きが見られた。保護者の学校評価アンケートから肯定的な回答が見られ、保護者も児童の学びの充実と奇異した実感があることがわかった。	・次年度も引き続き、保護者と学校が協力して子どもを育てていくという意識をもちながら、児童の学びにつながる活動の協力を仰ぎ、実施していきたい。

学校関係者の評価	学校運営のまとめ
<p>・7月に開催した学校運営協議会から 学校教育目標とともに身に付ける資質・能力についてお伝えし、学校を目指す子どもも保護者も学校経営について承認をいただいた。また、今年度の教育活動の再開に向けて助言をいただいた。今年度は市制100周年事業に関する取組や電子図書館のモデル校としての取組など、高い関心をもっていただいた。 ・2月学校保健運営委員会から 児童、保護者、校医、学校の4者による会の中で、児童による生活習慣の実態調査や学校衛生管理について、校医からは取組についてとても良いとの評価をいただいた。保護者からの食後の備みつき指導に関する質問や校医の助言をもとに今後の家庭の意識や学校の教育活動のあり方につなげて考える機会となった。 ・2月に開催した学校運営協議会から 学校評価アンケートの結果を報告を行った。また、電子図書館に関しては、興味をもったが、実際に操作を交えながら、読書活動の取組や内容などについて話題に上がった。他にも、改修工事後の校舎内の様子をご覧いただき、教室や学習環境の整備とバリアフリー化について、肯定的なお話をいただいた。</p>	<p>・今年度は5月から、新型コロナウイルス感染症が5類感染症に位置づけられ、授業参観、運動会、なかよしフェスティバルなどの学校行事を、人数制限なく実現することができた。このことは、保護者に学校での児童の様子を伝えるよい機会となり、大きな成果となった。制限のない取組により、児童の活躍の場が増え、学校全体が活気にあふれ、児童の主体性を伸ばすために効果が高いことや、学年間の縦のつながりに大きなかわりさつという価値があることについても感じるようになった。 ・GIGAスクール構想では、校内研究にも関わる部分もあり、学習のねらいに迫る手立てとしてGIGA推進未を活用できたことは良かった。学校の情報化に伴う、「川崎市デジタルトランスフォーメーション」の推進については、円滑な運用を目指すために、引き続き、最新の情報をキャッチし、継続して運用していく必要がある。 ・今後は、以前の学校のあり方に固執するのではなく、社会状況に合わせた新しい発想での試みをスタートしたり、子どもも主にした積極的な教育活動にトライしたりしていく。その際には、保護者・地域に理解が得られるよう丁寧に説明しながら、学校の教育活動を効果的・協同的に進めていきたい。</p>